

『「量子論」を楽しむ本』

ミクロの世界から宇宙まで
最先端物理学が図解でわかる！

佐藤勝彦監修／PHP 文庫
514 円＋税／2000 年

『脳と心の量子論』

場の量子論が解きあかす
心の姿

治部眞理・保江邦夫／講談社ブ
ルーバックス 940 円＋税／1998 年

やっぱり無謀な試みだった

坂田三允（長野県看護大学）

昔から、理科や数学は大の苦手だった。算数のレベルならまだしも、因数分解大嫌い、三角関数まったく受けつけず、化学記号なんぞ見るだけで頭が痛くなる。だから理科や数学が得意という人はもうそれだけで尊敬する。そんな私がなぜこんな本に手を出したか。

つい先ごろ、ある出版社の営業担当の人と話をした。もちろん彼の目的は看護の本の販売であったのだが、なぜか話はとんでもない方に進んでしまっ、四方山話に花を咲かせていたとき、彼が言った「物理学は哲学を超えましたよ」という一言につかまってしまったのだ。その言葉が何となく頭の中に残っている間に書店に行ったものだから、この2冊の本が目飛び込んできた。最先端物理学が心の姿を解きあかしてくれるのだという思い込みのもと、まずは量子論を楽しむことにしたのだった。

2冊を読み終えて、有森裕子さんではないが、私はとにかく最後まで文字を追いつけた自分を褒めてあげたい気分である。いや、正しくは、私のような無謀な読者に、途中で投げ出す気持ちにさせなかった著者たちの力量をこそ褒めたたえるべきである。

『「量子論」を楽しむ本』には随所に、次のような言葉が出てくるのだ。「理論的な部分は完全に理解されなくて結構ですので、太字で書いたポイントや結論の部分を押さえていってください」。私には理論的な部分は完全にどこかほとんど理解不能状態であった。だから「私たちはあまり疑うことなく“客観的な事実”というも

のが存在することを信じています。（中略）でも、量子論はそうした客観的事実の存在を否定しました。自然は観測によって状態が初めて決まるものであり、誰も観測していないときにはすべては決まっていらない」のだとする量子論の物質観・自然観は私にとってはわかるわからないの問題ではなく、信じる信じないの問題になってしまうのだった。

事情は『脳と心の量子論』という書に関しても同じである。この書は電場や磁場を量子論に基づいて考える「場の量子論」によって「心とは何か？」を説き明かそうとする書であり、読者は仮想の宇宙船にのって脳のミクロの世界へ導かれる。「そこに私たちが見いだした“こころ”の物理像とは、膨大な数の電子と核子が集まってできた物質としての脳組織そのものの中にははじめからなかったもの、物質とはちがう存在として考えられてきた電磁場の量子、光量子が無限に集まってできた凝集体だったのです。（中略）“心とは何か？”。その答は物質の中にはなく、光の中にあったのです！」。この答が正しいのか正しいのか私にはわからない。

物理学は哲学を超えたのだろうか。そういうことでもないようだ。それに、もはやそんなことはどうでもよいような気がする。さまざまな世界の把握の仕方があって、このような見方もその中の1つなのだと思う。けれども、私がこれまで避けていた学問の領域は途方もなくすごいことになっているのだということだけはとてもよくわかったのだった。



さかた・みよし

千葉大学看護学部助手、東京大学医学部附属病院（精神科婦長）を経て、1997年より長野県看護大学教授。日本精神科看護技術協会第二副会長。著書も多いが読書量も多い。しかもその守備範囲は広く、専門書からコミックに至るまで。特に好きなジャンルは推理小説とのこと。

●長野県看護大学：〒339-4117 長野県駒ヶ根市赤穂 1694